

統一テーマ「ロマンス諸語における統語論」総合討議総括

町田 健

日本ロマンス語学会第 6 2 回大会の統一テーマは「ロマンス諸語における統語論」であり、総合討議ではこのテーマに関して、以下の 4 件の発表があった。

1. 「談話標識の統語論研究における形式と意味の関係について」(東京外国語大学 土肥篤)
2. 「スペイン語の *siempre que* 節における叙法、時制、アスペクト」(愛知県立大学 長由佳)
3. 「フランス語の副詞 *essentiellement* の統合および意味の記述的研究」(東京大学大学院 宮腰駿、東京大学 渡邊淳也)
4. 「ロマンス語の「未来・前未来・条件法現在・条件法過去—統語的出現環境も視野に入れながら—」(山村ひろみ)

談話標識に関する土肥氏の発表は、イタリア語 *poi* のように、事態の成立時を表示する副詞としてだけでなく、話し手の事態に対する態度を表示する談話標識としても機能する語の機能的複数性を、生成文法の枠組みで説明する方法を検討したものである。

20 世紀の終わり以降に発展してきたカートグラフィー・アプローチでは、副詞と談話標識のそれぞれに異なった統語構造を想定する。このアプローチに対して近年では、これらを単一の語彙項目に属するとし、論理形式 (LF) において異なった表示が出力されることによって、複数の機能が実現されるものと分析する主張がある。さらに、論理形式においてもどの機能を表示するのかが確定しておらず、その後に行われる発話解釈において曖昧性が解消されると説明する方法の妥当性も検討すべきだという主張がなされた。

スペイン語 *siempre que* 節に関する長氏の発表は、以下のような内容であった。

*siempre que* 節中では、直説法と接続法のいずれかの法形式が用いられ、通常は主節に後続する位置に配置される。発表者が分析したコーパス中では、直説法の割合は約 45%、接続法の割合は約 55%であった。主節の動詞の形態と従属節の動詞の形態の頻度に関しては、以下の通りである。

主節が直説法現在→従属節：直説法現在 22%、接続法現在 31%

主節が直説法線過去→従属節：直説法線過去 13%、接続法過去 3%

主節が直説法未来→従属節：接続法現在 9%

主節が接続法現在→接続法現在 7%

従属節中で使用される動詞に関しては、*ser* (+possible) が 14%、*poder* が 7%であった。従属節が直説法現在の時、動詞が *poder* であれば、従属節が前置される例が 91 例、

後置される例が 101 例であり、同じ *poder* について、接続法現在であれば、従属節が前置される例が 37 例、後置される例が 120 例であった。動詞が *ser* の時は、直説法現在で従属節の前置が 16 例、従属節の後置が 43 例であった。接続法の場合は、前置が 169 例、後置が 665 例であった。

従属節が接続法の時は、動詞は *ser* が最も多く、特に *possible* が後続する例がよく見られる。また、従属節が直説法の場合は、動詞は *poder* が最も多く、習慣的な事態を表示する。

従属節の文中での位置に関しては、接続法の場合は主節に前置、直説法の場合は主節に後置される位置が多い。直説法か接続法に関わらず、前置の場合、使用される動詞は *poder* が多く、後置の時は *ser* が多い傾向にある。

フランス語の焦点化副詞 *essentiellement* に関する宮腰・渡邊氏の発表の内容は以下のようであった。

まず統語的な特徴としては、この副詞は、動詞付近、助動詞と過去分詞の間、過去分詞の後、名詞と形容詞の間、名詞と前置詞句の間、場所前置詞句の前、時間前置詞句の前、文頭、分裂文 *c'est...que* の中など、文中の様々な位置に配置されることができる。

文頭に配置される場合、*Lui essentiellement, il...* のような表現については、適格性の評価が揺れるし、「主語+*essentialment*+動詞」という構造は許容されにくい。

次に、意味的な特徴としては、この副詞は、文が使用される状況によって、修飾対象を含む範列を形成し、範列が構成する全体集合の中で、修飾対象を焦点化する機能を持つ。インフォーマント調査によれば、文頭にある場合は、*explication* または *définition, pour résumer* という解釈を受ける。分裂文 *C'est essentiellement que...* は許容しにくい、擬似分裂文では用いられる場合もある。

この副詞が文頭にある *Essentiellement X* という構造については、*X* と比べるものが文脈中にあれば、範列関係が構築されやすく、「特に、主として」の意味になるが、*X* と比べるものが文脈中になければ、「主語+述語」の述定関係が構築されやすく、「本質的に」の意味になるものと判断される。

ロマンス諸語の直説法未来形、条件法形に関する山村氏の発表は概略以下の通りであった。

直説法未来形は、発話時以降に成立する事態を表示することはロマンス諸語に共通であるが、モーダルな機能については、言語によって相違がある。

回想的未来(過去から見た未来)の用法は、イタリア語以外の全ての言語に見られる。語調緩和の用法は、全ての言語にある。推量はルーマニア語にはない。現在の驚き・憤慨・反語を表す機能は、スペイン語とポルトガル語が持っており、スペイン語とイタリア語では、現在における譲歩を表す機能がある。

条件節、時間節（when 節）中での使用も言語によって相違があり、イタリア語とルーマニア語では条件節に出現し、フランス語とイタリア語では時間節における使用が許容される。

前未来形は、未来の基準時に先行する時に成立する事態を表す時制的機能と、発話時に先行する時に成立した事態についての推量というモーダルな機能について、全てのロマンス諸語に共通である。

条件法現在形については、基準となる過去時に後続する時に成立する事態を表示する時制的機能は、イタリア語とルーマニア語には見られない。現在の反実仮想、驚き・憤慨・反語を表示する用法、語調緩和の機能はどのロマンス諸語にもある。スペイン語とポルトガル語には、過去の事態を推量する機能が、ルーマニア語には条件願望、比較、罵詈雑言を表す機能がある。

条件法現在形の従属節（条件節）での使用は一般的ではないが、イタリア語とルーマニア語では従属節でも使用される。スペイン語とイタリア語、ルーマニア語では時間節中での使用が見られる。

条件法過去形については、イタリア語で、過去時に後続する時における事態を表示する時制的機能がある。モーダルな機能については、現在の反実仮想、過去の伝聞を表す用法はどのロマンス諸語にも見られる。過去の事実に関する推量を表す用法も一般的に見られるが、イタリア語にはない。語調緩和・婉曲・遺憾を表す用法がポルトガルのポルトガル語にはあるが、ブラジルのポルトガル語にはない。驚き・憤慨・反語を表す機能は一般に見られるが、スペイン語とブラジルのポルトガル語にはない。

条件節中での使用は、イタリア語とルーマニア語で可能であり、時間節中での使用はスペイン語、イタリア語、ルーマニア語で可能である。

統語論は、基本的には文の構造を決定する規則を対象とする分野であるが、文の構造と文の意味、そして文を構成する語の意味には密接な関係があり、構造と意味を全く切り離して論じることは難しい。今回の総合討議で行われた発表でも、対象となる言語と項目に関する統語的現象だけでなく意味的現象についても併せて考察されていた。

談話標識は、文が表示する事態に対する発話者の判断というモダリティー表示の機能を持つ形態であるが、これが poi のように事態間の時間的關係を表示する副詞としても機能することができる場合、生成文法のように多義性をも文の構造の相違として処理する方法を選択する傾向にある理論では、異なった機能に対して異なった構造が想定される。しかし、同一の音形を持つ談話標識と副詞に関して、何らかの意味的特性が共有されていると考えることができる場合には、土肥氏の発表のように、統語的派生の最終段階である論理形式における相違、または論理形式に対して意味解釈規則が適用される過程での相違が談話意味機能の相違を導出するものと考えた方が、談話標識と副詞が持つ本来の意味的機能の共通性をよりの確に反映させることができるものと考えられる。

スペイン語の「*siempre que*＋文」のような、副詞に節が後続する構造が異なった法形式を後続させることにより、異なった機能を持つ従属節に関しては、統語的には主節と従属節の位置関係を問題にすることができる。辞書等の記述でも、従属節が直説法で「～する度に」という意味を表す場合には従属節が主節に後続し、従属節が接続法で「～の条件で」という意味を表す場合には、従属節が主節に先行する傾向にあるとされているが、コーパスを利用した分析を用いた長氏の本発表でも、この傾向が確認された。法の相違による従属節の位置の相違を導く理由についての言及は本発表にはなかったが、条件文の基本である「PならばQ」(P→Q, P⊂Q) という構造において、前件を表示するPが言語的には従属節によって表示されることから、接続法を用いて前件を表示する従属節が主節に先行することになるという可能性はあるようにも思われる。

従属節の法が接続法の場合に、述語が *ser* + *possible* であるものが比較的多いという事実は、従属節が表示する条件文の前件が、現実には成立する事態ではなく成立する可能性がある事態を表示するという特性に関係があるのかも知れない。主節と従属節の時制と法の関係に関して本発表で提示された資料は、主節が直説法であれ接続法であれ、主節の時制と従属節の時制が同一である傾向にあるが、主節が直説法未来時制の場合、従属節は接続法現在時制である例が比較的良好に見られるという事実を示している。

文が表示する事態を構成する要素の焦点化は、日本語では「が」「も」のような「とりたてて」と呼ばれる助詞によって表示されるが、フランス語では本総合討議での宮腰・渡邊氏による発表が取り上げたように、*essentiellement* のような副詞によって表される。この副詞が焦点化辞として機能するのだとすると、焦点化の対象となる要素は、同種の他の要素とともに集合を形成し、他の要素と範列関係を構築しなければならない。この結果、当該集合の焦点化された要素以外の要素については、事態の成分ではないという含意が生じる。これに対して、この副詞が修飾すると理解される要素と何らかの共通の特性を持つ他の要素を、状況から抽出して集合を形成することが困難な場合には、焦点化の機能をその要素に認定することができず、「本質的に」という焦点化機能を持たない意味を表すことになる。本発表の *essentiellement* の意味に関する主張はこのように解釈することができようが、今後はこの副詞の文中での位置と意味の関係、また他の同様の機能を持つ副詞と比較考察することによるフランス語における焦点化作用の一般的分析などが必要となるだろうと考えられる。

ロマンス諸語における直説法未来時制形は、ラテン語の同機能の形態とは全く異なっている。この未来形と形態的には共通の特徴を持っている条件法は、ロマンス諸語で独自に発達したものである。未来形も条件法形も、ラテン語の義務や意志を表す動詞の定動詞形と不定詞を組み合わせる方法で構成されており、ラテン語からロマンス諸語への変化の過程で、「モーダルな動詞＋不定詞」という構造の語句から単一の動詞変化形が形成されるようになったという、統語論的にも興味ある問題を提示するテーマである。

未来形と条件法形は、形態と機能の両面で、各ロマンス諸語で少しずつ違いがある。山

村氏の発表では、規範文法書の記述をもとに形態と機能の特徴が全体的にまとめられており、この問題を概括するために有用な資料を提供している。この分野で重要な課題となるのは、これらの形態が本質的に持つモーダルな特性の各ロマンス語における出現であるが、これを統一的に説明するための枠組みを構築することには困難が予想されるものの、この発表で提示された包括的な概観を契機として、現実世界の現在においては成立が可能であるだけの事態を表示する形態的・意味的条件が何であるのかを解明することが期待される。ルーマニア語が、他のロマンス諸語とはかなり異なる方法で未来形や条件法形を形成しているという事実の分析は、今後の研究に委ねられるが、イタリア語で、他のロマンス諸語のように条件法現在形でなく条件法過去形が過去未来の機能を表示するという特徴的な現象は、この言語における条件法形の形成で選択されたのが、ラテン語 *habere* の直説法半過去形ではなく単純過去形であったことに由来するのではないかという解釈は、今後さらに追究していく必要があると思われる。